



今日も道内の新たなCOVID-19感染者は233名、札幌市は17日から警戒ステージ4相当の体制となったが、札幌市以外の全道域でも18日付でフェーズ2に切り替えとなるようだ。ピークは終わった？の期待が裏切られる日々が続く。感染拡大防止のため自粛を続ける大多数と、自粛に耐えられなくなり危険地域に出かけてしまう人。困難を克服すべく待機し、行動開始に備えて努力を積み重ねる、根気のいる時期だ。

3度目の宇宙を目ざして、スペースX社の、民間宇宙船クルードラゴンに搭乗した野口聡

試されるレジリエンス

情報広報部長

藤井 美穂

一さん達4人のクルーは、今回の宇宙船を「レジリエンス」と名付けたそうだ。COVID-19との闘い、自然災害やオリンピック延期、アメリカの人権問題など世界の多くの課題に立ち向かい克服する誓いを、このレジリエンスに託したという。

11月16日午前9時27分に打ち上げが成功し、27時間半後の17日午後1時過ぎに国際宇宙ステーションにドッキングした。ここで野口さんはiPS細胞の3次元構築の研究も含め実験を続けながら、6カ月間過ごし、将来人間が宇宙で生活する可能性を実践する。

野口さんはJAXAに応募した宇宙飛行士希望の572人から宇宙飛行士候補者として選定され、1996年訓練を開始してから9年後の2005年、ディスカバリー号に搭乗し宇宙に旅立った。2度目の宇宙は2009年ソユーズ宇宙船に乗り込み、国際宇宙ステーションで5カ月間の滞在。今回3度目の宇宙でのミッションを果たすことになる。

野口聡一さんの表情は、宇宙に行く夢を追い続ける少年の顔と、誰をも受け入れるおからかで、それでいて力強い意志を表す。「宇宙飛行士の性格で大事なものは、クヨクヨしないこと。失敗しても気持ちを切り替えてもう一度挑戦すること。心をかける」と

子ども達にメッセージを伝えるタフガイだからこそ、3回目となる今回の宇宙生活なのだろう。

一方、宇宙飛行士を夢見たが叶わなかった男性のインタビュー記事を見つけた。「宇宙飛行士選抜試験」12年間語ることでできなかったファイナリストの記憶」。スペースシャトルに憧れて宇宙エンジニアになった彼は、小さい頃からの夢「宇宙飛行士」になるために、10カ月におよぶ選抜試験に挑戦し、10人のファイナリストの1人となった。しかし、一緒に戦ったファイナリストの中から3人が次々に宇宙飛行士となり国際宇宙ステーションでミッションをやり遂げ帰還。選ばれ

なかったファイナリスト達も切磋琢磨しながらそれぞれ成長していくが、筆者は宇宙飛行士になれなかった事実を受け入れられず、10年間を封印してきた。挑戦の機会を与えられず、少年の夢が行き場を失ったまま過ぎた長い時間に、今回、真正面から振り返る手記を書くことで新しい歩みをはじめたいと語った。夢を追いかけてきた若い研究者の中で、宇宙飛行士になった勝者となれなかった敗者、という現実が宇宙開発の背景にある。しかし、宇宙飛行士となった野口さんも、572倍の選抜試験に残り、初めて宇宙船に搭乗したのは9年が経過した時である。レジリエンスを鍛え、現状を受け入れながら夢を捨てない者だけが夢を実現できることを、野口飛行士の穏和な表情の奥の意志の強さから感じ取れる。

2020年、挑戦したいことが山ほどあっても、行動できないことが多かった。しかし一方、AIやITの導入は予定の10倍速で進みそうな勢いである。学会や研修会がWeb開催となり、対面式では限られた参加が拡大した。進みの遅かった医師の働き方改革も、通勤の密を避けるために取り入れたフレックスタイム制やワークシェアも、否応なく導入せざるを得ない状況にもなり、動いてみれば難なく機能した。

民間宇宙船がレアメタルを地球に持ち込むことによって、エネルギー問題を解決し、無重力環境の中で様々な生理学研究が進む期待が高まる。野口宇宙飛行士とレジリエンス号のクルー達は国際宇宙ステーションから、きつと『ものごとを多面的に捉えよ』と地球にエールを送っているに違いない。